

古川柳文芸句研究 — その五 —

大野 雍 熙

A Study on the Kosenryu Bungeiku (A Genre of Old Japanese Short Poetry) — Part 5 —

Yasuhito OHNO

五 (承前)

百人一首の親族関係についてみたい。親子関係は、次の十八組である。このことについては、既に「小高敏郎・犬養廉」著「小倉百人一首新釈」に述べられている。その記述を引用しておく。

- 天智天皇(1) — 持統天皇(2) 遍 昭(12) — 素 性 (21)
- 陽成院 (13) — 元良親王(20) 康 秀(22) — 朝 康 (37)
- 定 方(25) — 朝 忠(44) 忠 岑(30) — 忠 見 (41)
- 兼 盛(40) — 赤染衛門(59) 元 輔(42) — 清少 納言(62)

- 伊 尹(45) — 義 孝(50) 公 任(55) — 定 頼 (64)

和泉式部(56) — 小式部内侍(60) 紫 式部(57) — 大式 三位(58)

- 經 信(71) — 俊 頼(74) 俊 頼(74) — 俊 惠 (85)
- 忠 通(76) — 慈 円(95) 頭 輔(79) — 清 輔 (84)
- 俊 成(83) — 定 家(97) 後鳥羽院(99) — 順徳 院 (100)

右の表によれば、巻頭に天智・持統の父子の和歌を、巻末に後鳥羽院・順徳院の父子の和歌をと、それも天皇父子を巻頭と巻末に配列して百人一首を構成しているというところを読み取ることができる。

この点については、小倉百人一首の注釈書などでも問題にしているところである。本稿は、古川柳文芸句の考察を主としているため、これ以上深入りはしないつもりである。

筆者の調査によれば、右に掲げた表以外にも、親族関係が存在する作者がある。兼輔(27)が曾祖父で、曾孫が紫式部(57)、その子が大式三位(58)という関係が成立する。また、大納言經信(71)源俊頼(74)―俊恵法師(85)も同様な関係が成立する。源三位頼政は百人一首にとられた歌人ではないが、二条院讃岐(92)は娘である。この関係を詠んだ句に、

人こそしらね頼政がむすめ也

二六二八

が見える。「人こそしらね」の句は、(92)の歌詞に拠ったものである。

祖父と孫との関係にある者として、大中臣能宣(49)―伊勢大輔

(61)、清原深養父(36)―清原元輔(42)がある。

おふくろと二人^リ定家ハすへて置^キ

三三三〇

右の句は「おふくろ」と詠まれているところから、和泉式部(56)、紫式部(57)を指すものである。母と娘が揃って百人一首に取られていることを詠んだものである。古川柳の作者達が、実によく調べての句作というほかはない。「百人一首一夕話」の「小式部内侍」(60)の条に、

母の和泉式部小式部を生みて後……………

とあり、大式三位(58)については、

この人は左衛門佐藤宣孝と紫式部の中に生まれたる女なり。と述べられているところから、古川柳文芸句の作者程の人は、「百人一首一夕話」を読んで知悉していたことであろう。

兄弟も親子もならぶ百人一首

三六三二

右の句の親子関係は表を引用した通りである。「兄弟」は、先に挙げた

百人の内色師はらからならんでる

やない筈一 11

と詠まれている中納言行平(16)と、在原業平朝臣(17)とを指す。

二人共文屋に秋の風を詠^ミ

五六一

右の句は、父の文屋康秀(22)と、子の文屋朝康(37)のことである。文屋康秀は六歌仙の一人で、百人一首に採られている和歌は、

吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風をあらしと言ふらむ

であり、文屋朝康の和歌は、

白露に風の吹きしく秋の野は貫きとめぬ玉ぞ散りける

である。従って「秋の風を詠^ミ」ということになる。上述の如く、この父子の和歌は、子の朝康作ではないかという論がある。鈴木知太郎氏著「小倉百人一首」によれば、(22)の和歌について、

ただし異本は読人を「文屋朝康」としており、また古今集高野切にも「ふむやのあさやす」とあるところから、事実上朝康の歌とすべきかも知れない。

と述べられている。また、石田吉貞氏著「百人一首詳解」には、

契沖は康秀の年齢等から、この歌の作者を文屋朝康かと疑って

いるが、『古今集』の諸本のうちで、高野切・清輔本「朝康」となっている。

と述べられている。右に引用した二説とも、朝康説が強いが、本稿は百人一首の研究が対象ではないので、諸説を挙げるにとどめる。因みに、古川柳文芸句の作者達は、この点について前掲した句の如く、二人二歌と考えていた。

六

次に、百人一首の景物を詠んだ文芸句についてみよう。

秋は露春は雪にて御衣か濡

七一八

右の句は、前述した和歌の配列1・2の関連を詠んだものである。

定家卿四五月頃の月も入れ

四七三八

哥詠ミを閉口させる三日の月

八三七二

天象の部の月については、百人一首で「月」を詠み込んだ和歌は、

7・21・23・31・36・57・59・68・79・81・86の十一首である。

百人へ有明たった四ッ入れ

四二二一

「有明」の月を詠んだ百人一首の和歌は、21・30・31の三首である。

有明も只有明も名哥也

二八一九

右の句は、81の歌詞「ただ有明」に拠ったものである。

京染と江戸染百へ月を讀

三三三六

地象に関する文芸句は、

上段へ伊勢も定家も富士をすゑ

八九一六

右の句は、伊勢物語も百人一首も、最初の方に富士山を詠み込んだ和歌を置いたことである。伊勢物語では、第九段に、

富士の山を見れば五月のつごもりに、雪いと白う降りり。

時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪の降るらん

とある。百人一首では、4 山部赤人の和歌が該当する。

動物の部では、鹿が5・8の二首に詠み込まれている。

百人一首で鹿をはたった二疋飼

一四〇一〇

の句がみえている。

草木類では、「桜」を詠み込んだ句七句が見られる。桜―73、桜の花―33・35、(桜の)花(の色)―9・96、山桜―66、八重桜―61である。桜の次に多いものは「紅葉」―5・24・26・32と、「もみちば」―69の五句が詠まれている。ところが、「梅」は百人一首では一首も詠み込まれていない。この点に着目して詠んだ句がみえる。

百人は言葉もかけぬ花の兄

四九三六

「花の兄」とは「梅」の意である。

御高でも哥ても梅八百の外

六六一

山櫻百にはもれて千に入り

八二二九

右の句の「山櫻」は、桜の条で述べた如く、

66 もろともにあはれと思へ山櫻花よりほかに知る人もなし

と前大僧正行尊が詠んでいるのであるから、右の句は作者「巨眼」の記憶違いであろう。「巨眼」は、すぐれた文芸句作者で、数多く

の文芸句を詠んでいる。従って、「巨眼」にしてはめずらしい誤りと言つてよいであろう。なお、「千」は定家の父俊成の撰した「千載和歌集」を指すことは勿論のことである。

次に、鳥獸の部の中、鳥の部についてみよう。百人一首の中では三種の鳥が詠み込まれている。「かささぎ」―6、「千鳥」―78、「ほととぎす」―81である。「かささぎ」についての句は未見である。「千鳥」については前述した、

千鳥を伽に稲田九郎兵衛

宝曆中東月評方句合

がみられる。序でに歌詞に拠る九郎兵衛の句一句を挙げておこう。

いく夜寝覚めの九郎兵衛が城

明和1橋中仙1

「ほととぎす」を詠み込んだ和歌は一首であるのに、この関係の句は多い。

百人の中へ一ト声ほととぎす

九11

京にすくない鳥百に壹ッなり

一三24

繪に書た時鳥さへ一羽ぎり

一七24

右の句は、別項で述べる歌留多取りの繪に托して、一首であることを詠んだものである。

百人の内に明ヶ方壹人り聞き

二四6

一トこへ八月にのこして集に入り

四〇34

たった一声北野でも小ぐらでも

四六35

あやふやな哥てハ啼ぬ時鳥

五八34

二声と啼ぬ小倉の郭公

六〇2

鶯のまゝ子を一羽集に入れ

二九19

鶯はないが里ツ子集に入り

四〇6

右の二句は、「ほととぎす」が「うぐいす」の巢に卵を産んで、鶯がそれを育てるところから、「まゝ子」、「里ツ子」で、ほととぎすを暗示した句である。右の二句と同趣の句に、

百へ入れたのは敷きりなどでなし

二七3

百へ入れたのは雀にならぬうち

二八4

がある。

鳥類の中、百人一首に「鶯」を詠んだ句が見えない。この点を指摘した句が多い。

定家の門にうくひすないて居る

一三5

鶯をかわいそうにと母ゑがい

一四3

小倉山鶯斗りつんにがし

四八18

御馳走に啼くと御一首残る所

五四12

鶯も蛙も鳴かぬ小倉山

五六7

鶯の初音ハ聞かぬ小倉山

五七22

鶯も蛙もよみし大和文

五九3

鶯も蛙も同じ哥のとも

七一3

京は鶯白川は尸のこゑ

八七8

鶯のうへに蛙ハたゝん事

八九21

鳥かけも鶯ならハ哥の友

九〇33

鶯も梅も小倉にかこちがほ

一四〇28

鶯ハいぬ筈梅のなひ小倉

一五七 16

右の句の中、「鶯」と「蛙」を詠んでいる句、すなわち、五六七、五九三、七一三、八九二の四句は、いずれも古今集仮名序の、

花になくうくひす、みずにすむかはずのこ糸をきけば、いきと

しいけるもの、いずれかうたをよまりける。(傍線筆者)

を念頭に置いての句である。

百人の内チ壹人リ喰ふ初かつほ

二三 33

右の句は、93鎌倉右大臣源実朝を詠んだものである。鎌倉に居住していたので「初かつほ」を百人中一人だけ食べたのであろうというのである。なお、前掲の、

京談に關東べいも一首まぜ

やない筈二 9

の「關東べい」も、実朝のことである

七

最後に、遊戯としての歌留多取りについて述べておこう。

この関係の句は非常に多いので、一部を掲出するにとどめる。

歌留多取りの人数・方法は、次の句によって知られる。

百人を五六人して追まはし

四〇 12

哥かるた人といふ字に手が五ツ

拾初 9

百人首二ツにわつて御なくさみ

六 20

ごうせいなうで、下の句取はぐり

二〇 10

古哥を百よんで仕廻ふと疊也

川傍柳一 11

大体正月に行ったが、終了時刻は次の句によって知られる。場合によって刻限が延びることもあった。

哥かるた子の刻迄がかぎり也

一〇 18

鶏の啼く迄馬鹿な歌かるた

川傍柳一 26

歌留多取りは、主として女子の遊戯として行われたことは、

ふり袖で度々、上_ミの句をくずし

四 10

ふり袖をうごかすたびに哥がへり

一五 28

の句によって知られる。時には、男が混じることもあった。

哥かるた好いた男を入したが

一〇 23

哥かるた仲間へむすこまきれこみ

一〇 27

哥かるた女の中へまけに出る

一九 11

哥かるたやろう疊のうへてなし

拾九 30

取り方は、読み手が百人一首の上の句から読み、取り手は下の句を取る方式である。

百人一首二ツにわつて御なくさみ

六 20

ちぎれた哥を花姫ハくつ付る

一四 42

姫が出て發句をみんな哥にする

二四 6

讀きらぬ内に取なと姑言ひ

五九 27

取り手の名手は、右の句から知れるように、古川柳では嫁と決まっていた。

哥かるた姫こまや程つんで置

一一 8

嫁の出る迄はまだるい哥かるた

一七 3

哥かるた人の丁場を姫あらし

二四 11甲

右の一句は、取り手の行儀について詠んだ句である。このことについて詠んだ次のような句も見えている。

二百枚あるとかるたもひんがよし

玉柳 25

雪露の論焔て姫捌き

六二 2

田毎ほど姫とり溜る月の歌

一二五 35

哥かるた大先生とよめをほめ

拾二 26

嫁のひざ公家や官女や坊さまや

安永四年札 3

嫁の中にも無筆がいたことを詠んだ句もみえる。

花姫のうきがともに八百人一首

九 11

哥かるた見物をするはつかしき

九 17

小倉山歌に紅葉ハ嫁無筆

八一 7

嫁の上手に対して、下女は下手なものと、古川柳では決っていた。乳母もまた同様である。

哥がるた無筆なやつは箱のやう

七 22

哥かるたとふく下女はどぶをくい

五 27

哥かるた下手またぐらへ取りためる

二三 23

そこだよといはれて下女も一首取り

二八 9

下女手がら百人の首三ツとり

三七 16

哥かるたつんぼと下女と餅を焼

五九 7

哥かるた手ひどく乳母ハいじめられ

初 43

哥かるた乳母ハきつてたゝきつけ

九 3

歌骨牌乳母が無筆で静也

武玉川一七

百人一首の内容を詠んだ句もみえる。

田毎程月を並へる哥かるた

五八 21

月花に嵐を好む哥かるた

七五 26

歌留多取りにも女の意地があった。次の句がそれである。

哥かるたにも美しひ意地が有

初 22

歌留多取りの遊戯が終ると、読み札と取り札は、それぞれ箱に入れた。

箱入かまた百人を箱へ入

六六 10

句頭の「箱入」は、「箱入娘」のことである。

以上簡単ではあるが、「その四」につづいた総論に相当する本稿を終了することとする。

(一九八三・六・四稿 一九八四・七・二二筆)